2008年／日本／カラー／ビデオ／129分
監督:田代陽子／撮影:田代陽子・一坪悠介／録音:岸本祐典／ 編集:田代陽子・岸本祐典／音楽:新得バンド／ 整音:久保田幸雄
ナレーション:田代陽子／プロデューサー:藤本幸久／ 製作:(有)森の映画社／ 宣伝(東京):太秦株式会社／ 芸術文化振興基金助成作品

始まりは、「空想の森映画祭」との出会いでした。
ずいぶん長い時間がかかったけれど、一本の映画が
北海道新得町から生まれました。

1996年、北海道のほぼ真ん中に位置する新得町（しんとくちょう）で、小さな映画祭がありました（SHINTOKU空想の森映画祭）。その映画祭に参加した田代陽子が、そこで初めてドキュメンタリー映画と出会いました。それから彼女は、この町で農業をして暮らしている人たちと出会っていきました。

社会に馴染めない人、障がいを持つ人、色んな人たちと共に生きていこうとする農場、新得共働学舎で、子育てをしながら野菜をつくっている山田聡美さん。彼女は共働学舎に来て13年目。結婚して娘も生まれ、これからの暮らし方を改めて考えていました。自分にとって共働学舎とは、野菜をつくることとは…。家族で独立しようか、思い悩む若い夫婦。

1970年代後半に、食べ物をつくって暮らしていこうと、京都から新得町に入植した宮下喜夫さん。3人の子供はそれぞれ独立し、妻の文代さんと2人で、極力機械を使わず、自分の体を使って日々畑で働いています。

この2家族を軸に、食卓の風景、土の上で働く姿など、何気ない日常の中に、色々な感情がわきおこり、明日への希望が垣間見えてきます。

この映画は、言葉で表しにくい映画です。日々の暮らしの中には、言葉にしてしまうと陳腐になってしまうような感情があります。七年という月日の中で、私たち撮影隊が、被写体の人たちと向き合い、映画にすくいとったものは、土の上で働く人の姿。子どもと接する親の姿。日々の食卓での家族の姿。農場で大勢の人たちが共に暮らす姿。農場の動物、野菜。一年に一度のお祭りに集う人たちの姿。

日々の何でもない日常が妙に愛おしく、夢中で撮影した北海道新得で暮らす人たちの物語です。映画をつくることで、つくり手の私たちと被写体の人たちが共有した小さなドラマが、この映画にはちりばめられています。

『空想の森』監督　田代　陽子

30年前に新得に来て、いろいろな人と一緒に生きていこうとはじめた共働学舎の生活。ここでは、毎日の生活がゆっくり、淡々と流れていく。それが映画になるのだろうかと思った。だが、田代監督は、日常の中で、どのように生きていくかを迷い、決断していく姿を、見事に映し撮っていた。

宮嶋望（新得共働学舎代表）

若い頃、私が漠然と夢見た北海道での暮らしが、そのまま、この映画の中にありました。カメラを持った（だから映像には映っていない）一人の女性が自分のように感じられる映画です。

根岸季衣（女優）

『空想の森』の点と線
「食」と「子育て」は生の根源だ。食なくして子育てはできず、子育てなくした人類の明日はない。『空想の森』は「食」という小さな点を描くことによって人類の未来を照射した現代人必見のエコロジカル・ドキュメンタリーだ。

植草信和（元キネマ旬報編集長）

「おめでとう」
田代陽子さんが映画を作りました。
彼女は、僕も第一回目から参加している「新得空想の森映画祭」の重要なスタッフであり、その新得で培い得たものを映像に撮りあげました。
10年ほどの長期にわたる撮影のプロセスにときとして触れてきましたが、今回「空想の森」として完成させました。大自然と人間が共存しあおうとする視線、そして、長期にわたるがゆえの機微あふれる年輪＝成果が、田代陽子の息づかいとして完成しました。
おめでとう。

あがた森魚（ミュージシャン）

2008年／日本／カラー／ビデオ／129分
監督：田代陽子／撮影：田代陽子・一坪悠介／録音：岸本祐典／編集：田代陽子・岸本祐典／音楽：新得バンド／整音：久保田幸雄
ナレーション：田代陽子／プロデューサー：藤本幸久／製作：（有）森の映画社／宣伝（東京）：太秦株式会社／ 芸術文化振興基金助成作品

http://soramori.net/